

## 「腐敗」ランキングを読む

盛田 常夫

毎年、夏の終わりに、腐敗感応指数 (Corruption Perception Index by Transparency International) が発表される。一番クリーンな国は 10 点満点、どうしようもない国は 0 点。2002 年のランキングでは、クリーンなフィンランド (9.7)、デンマーク、ニュージーランド (9.5) から、どうしようもないナイジェリア (1.6) やバングラデッシュ (1.2) まで、百数十カ国の国がランキングされている。日本は 7.1 で 20 位だが、体制転換途上にある諸国は軒並み点数が低い。それでもハンガリーは 4.9 で 33 位に位置し、ポーランド (4.0、45 位)、チェコやスロバキア (3.7、52 位) よりはるかに良い位置にある。ちなみに、ロシア、ウクライナ、ルーマニアは 3 点以下で、70 位以下にランクされている。

### 体制転換と腐敗

社会主義からの体制転換を図る諸国で、どうして腐敗が蔓延しているのだろうか。道理は明白で、国家資産が民営化される過程で、国家資産の横領、私物化、インサイダー情報による資産の取得、民営化関連の官庁・官僚の買収、政府へのロビー活動が、社会の全領域で展開されるからだ。

民営化される国家資産の大きさに比例して、腐敗度も大きくなる。ハンガリーのポシュタバンクの累積損失が当時の価値で 1000 億円と仮定してみる。ここに群がった人々は 1000 人を下らないから、一人当たり平均で 1 億円としよう。これに比べて、ロシアでは外人投資家を排除した石油・ガス会社の民営化で富を得た少数の知恵者は、一人で 1500 億円を超える資産を手にした。手にする価値が三桁も違う。ということは、腐敗の度合いも利権をめぐる抗争も、それに比例しているということだ。

私が 1995 年春にモスクワを訪問した時に、*Moscow Times* は 1994 年の年間暗殺件数が 130 名という記事を書いていた。ちょうどその頃、ロシアの超人気者でテレビ・トークショーのキャスターであるリスチェフ暗殺事件が起きた。チェルノムイルジン首相に同行して英国訪問していたベレゾフスキーに嫌疑がかけられ、ベレゾフスキーは急遽モスクワに戻り、警察の尋問が始まる前に、エリツィン大統領に潔白を訴えるビデオを送った。1994 年までにモスクワのマフィア戦争を勝ち抜いたベレゾフスキーが次の目標としてテレビの支配を企てており、NTV を支配する有力マフィアのグシンスキーとチャンネル 1 の私物化に反対するリスチェフはベレゾフスキーにとって排除すべき人物だった。

しかし、ベレゾフスキーはこの危機を乗り切り、逆にエリツィン一家に取り入り、エリツィンの末娘タチアナを懐柔して、1998 年にはロシア航空アエロフロートの支配まで手を広げた。アエロフロートの外貨収入を、自らがスイスに設立したダミー会社を経由させるという信じられないようなシステムを構築し、エリツィン政権の虎の威徹底的に利用した。

KGB プーチンの登場によってしか浄化できないほどに、ロシアの国家権力は私物化されてしまった。プーチンが大統領に選出されて、ベレゾフスキーとグシンスキーは国外に逃れた。ベレゾフスキーは英国に、グシンスキーはスペインに滞在している。逮捕状が出されているので、帰国できない。

### 秘密警察と暗殺事件

エリツィン時代に暗殺された国会議員は 6 名。プーチン時代になってから議員の暗殺事件は起きていないが、この 8 月末にその最初の犠牲者がでた。今年結成された「自由ロシア」に会派を移し、副党首になったばかりのゴロヴレフである。「自由ロシア」は英国に亡命中のベレゾフスキーが作った党だ。ベレゾフスキーへの警告か、ゴロヴァレフがかかわっている汚職事件の秘密封じだとされている。

ハンガリーのフェニュー暗殺事件を含め、この十数年に起きたこの地域での暗殺事件では犯人（実行者、主犯）がほとんど逮捕されていない。マフィア抗争まで入れると、犠牲者の数は計り知れない。チェチェンやアルバニアからの出身者に、わずかなお金で暗殺を依頼する囑託殺人がほとんどで、犯人も依頼者も追跡できないという状態が続いている。

その非常に稀有な例外が、この 7 月にチェコで発覚したジャーナリスト暗殺未遂事件であり、もう一つが 2 年前、ウクライナのクーチマ大統領が暗殺を指令したとされるジャーナリスト・ゴンガジェ暗殺事件である。

後者の事件は、大統領の不正を暴露したゴンガジェ抹殺指令の大統領の会話を当時の情報部員が録音テープに残していたことから発覚した。当時、西側政府は一斉にウクライナ政権を非難したが、現在もなお、ウクライナ国会の究明委員会で大統領告発の準備が進められている。BBC はこの春、この事件のドキュメンタリーを放映して、事件を風化させないように注意を喚起している。

前者のチェコの事件は、現在もなお究明中である。暗殺の主犯とされるカレル・シュルバは前外務大臣カヴァン（現、国連総会議長）のアドバイザーの経歴をもち、軍事諜報部員であったことが分かっている。暗殺の対象となったスロンコーヴァ女史は前社民党政権の腐敗を暴露したことで、逆に前ゼマン首相から告訴されていた。ハヴェル大統領は一貫してスロンコーヴァ女史を擁護し、今回の事件でも、政府にたいしカヴァンの召還を要求している。最近の報道では、暗殺事件の背後には軍部の不満分子の暗躍があり、秋の NATO プラハ会議を妨害する企ての一貫だったとも解説されている。

総選挙を迎えているスロバキアでは、メチアル政権時代に、メチアル首相と対立するコヴァツ大統領の息子を誘拐する事件が発生した。メチアルの指示で誘拐を実行したとして国際手配された旧情報部員イヴァン・レクサが南アフリカから戻ったところを逮捕された。しかし、2ヶ月の拘束の後に、この 8 月に釈放された。魑魅魍魎、奇奇怪怪。

### 漁夫の利を得た者

1990年代から現在まで、旧社会主義国では国家資産の民営化が続けられている。巨額の資産の民営化をめぐる、この十年、多くの人々が利権をめぐる闘いを繰り広げてきた。この体制転換のカオスの中で、漁夫の利を得たのは、やはり旧体制のエリートだった。エリート官僚、エリート国営企業経営者、エリート党官僚（とくに財政担当、資産管理者）そしてエリート秘密警察・情報部員だった。彼等は保有する情報と人脈を利用して、誰よりも早く資産の所在を発見し、それを元手なしで取得する方法を考えついた。もちろん、国営銀行と政権の利用が必要な場合もある。だから腐敗はすべての政権に及ぶ。国営銀行の食いつぶしは、どこの国でも観察できる普遍的な現象である。もちろん、それは国家予算、つまり税金で処理されている。

2002年9月